

稲葉東・喬

昭和前期の稲葉家



上 稲葉東・喬【写真A008】、中左 稲葉東・喬【写真C007】
中左 稲葉東・喬【写真A103】、下 稲葉東婚礼写真（昭和18年4月2日）【写真B770】

はじめに

稲葉東・喬は、一三代稲葉市郎右衛門景介の長男・次男です。

長男の東（つかね）は、久美浜町久美谷村組合立久美尋常高等小学校へ入学後、六年生の時に京都市立銅駝尋常小学校へ転校・卒業しています。京都府立京都第一中学校（現在の洛北高校）卒業後、早稲田大学専門部政治経済科に入学しました。大学卒業後は、理研保温材工業所や宮地鉄工所へ勤めています。戦時下に入った昭和十八年三月に結婚し、昭和十九年六月二十五日に召集を受け、昭和二十年四月一九日に沖縄の西原・我如古（現在の沖縄県浦添市・宜野湾市）にて迫真砲を受け戦死しました。

次男の喬（たかし）は久美浜町久美谷村組合立久美尋常高等小学校へ入学後、五年生の時に京都市立銅駝尋常小学校へ転校・卒業しています。京都府立京都第二中学校（現在の鳥羽高校）卒業後、広島高等学校（現在の広島大学）文科甲類へ入学し、陸上競技を得意としていました。卒業後、神戸商業高等学校（現在の神戸大学）へ入学しましたがすぐに退学し、東京帝国大学（現在の東京大学）経済学部へ入学しました。昭和十六年三月に学十試験に合格、卒業します。大学卒業後は、昭和電工株式会社大町工場へ就職し、召集後、昭和十九年六月一二日にインパール作戦従軍下のビルマで死亡しました。

跡継ぎとなる二人の男子の戦死は、昭和前期の稲葉家にとって悲劇というべき出来事でした。

本リーフレットでは、残された文書と写真資料などから、稲葉東と喬の兄弟を通して、昭和前期の稲葉家の動きを見るものとしました。

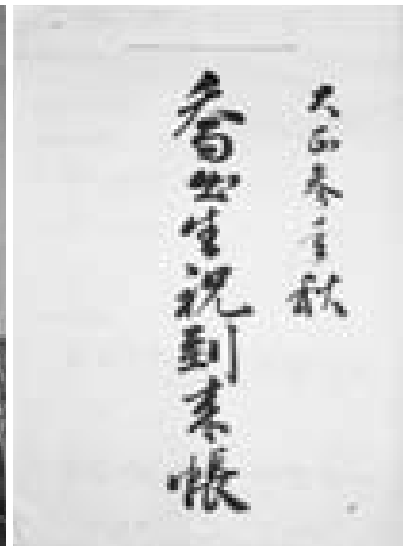
（文中人名の敬称は略させていただきます。）

一・稲葉東・喬の誕生と小・中学生時代

東は、大正二年二月三日に誕生しました。三〜四ヶ月前後の時期には、風邪をひいて小児科にかかっていたことが親戚宛の書簡からわかります（稲葉家文書C六七・三三五ほか）。姉の曾根は生まれていましたが、はじめての男児



喬（中央）・曾根（左）・東（右）
【写真ガラス乾板095（陰陽反転）】



大正三年秋喬出生祝到来帳
【稲葉家文書C65-034】

ということ、大事にされていたことがうかがえます。久美浜町久美谷村組合立久美尋常高等小学校へ入学後、六年生の時に京都市立銅駝尋常小学校へ転校・卒業しています。京都府立京都第一中学校卒業後、昭和六年四月には早稲田大学専門部政治経済科に入学しました。

学しました。

次男喬は、大正三年九月一〇日に誕生しました。「大正参年秋 喬出生到来帳」（稲葉家文書C六五・〇三四）には、九月一四日より十一月一二日までに稲葉家へ届いた出生祝が記録されています。一〇月二五日には宮参りを行っており、その折の献立などが記されています。

喬は、久美浜町久美谷村組合立久美尋常高等小学校へ入学後、五年生の時に京都市立銅駝尋常小学校へ転校・卒業しています。そして京都府立第二中学校を卒業し、昭和九年四月には広島高等学校（現在の広島大学）へ入学しました。



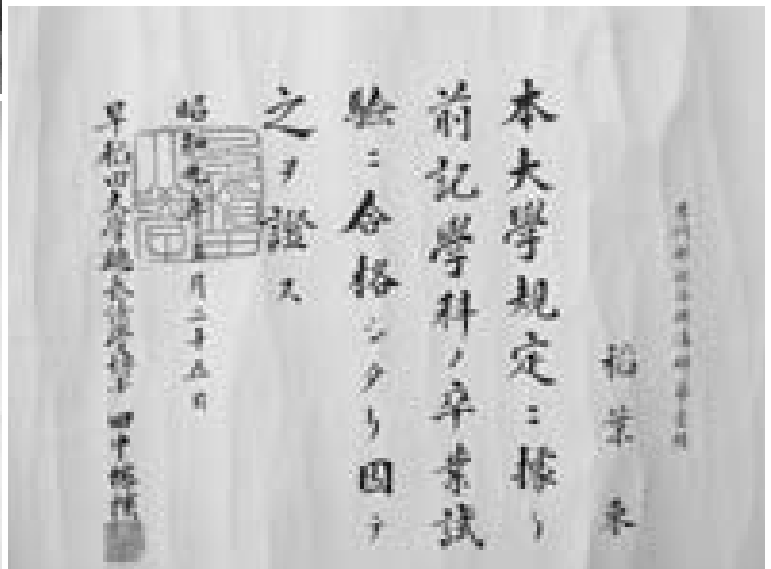
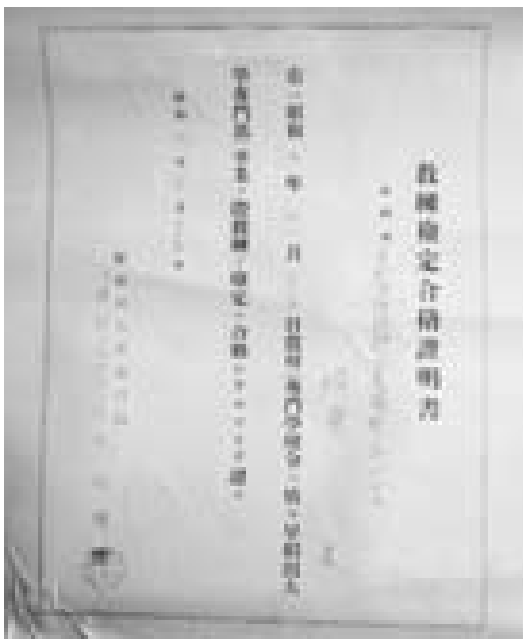
右上 左より稲葉曾根、小松、喬、束
【写真ガラス乾板171（陰陽反転）】
右中 卒業証書【稲葉家文書C55-168】
右下 卒業証書【稲葉家文書C55-170-1】
左上 稲葉束【写真A001】
左下 稲葉喬【写真A002】



二・稲葉東の早稲田大学時代

東は、京都府立京都第一中学校卒業後、昭和六年四月に早稲田大学専門部政治経済科に入学しました。当時の資料としては、写真アルバム二冊が残されています。アルバムには、早稲田大学の構内や親友の写真、久美浜へ帰ってきた時の写真などがあり、こまめなメモのおかげで東の動きがよくわかります。昭和七年には、大学の親友が久美浜へ遊びに来ており（写真A〇五八～〇六一）、昭和八年には家族で出雲方面へ旅行し、三朝温泉に宿泊しています（写真A一〇〇～一〇三）。同年夏には親友と黒部方面へ旅行しています（写真A一三二～一三五）。またバイオリンや弓道を嗜んでいました。あわせて、当時の状況がわかるものとして、富士山麓にてあった野外軍事演習の写真があります（写真A一二六～一二三）。大学では、軍事教練も行われており、卒業証書とともに「教練検定合格証明書」が残されています（稲葉家文書C五五・一七二・一二）

- 右上 早稲田大学入学当時の稲葉東【写真A027】
- 右下 東・曾根・小松・喬【写真A037】
- 左上 山陰旅行のひとつま【写真A100】
- 左中 大学時代の親友たち【写真A082】
- 左下 富士山野外演習【写真A119】



左上 大学時代の親友【写真A080】、中上 バイオリンを弾く東【写真A083】、右上 弓道をする東【写真A038】、左中 読書をする東【写真A086】、右中 徴兵検査記念写真【写真A140】、左下 教練檢定合格証明書【稲葉家文書C55-171-2】、右下 卒業証書【稲葉家文書C55-171-1】

三・結婚前の稲葉束

稲葉束は、昭和九年三月に早稲田大学を卒業します（稲葉家文書C五五・一七一・一）。その後、久美浜に帰っている時期もあり、地元青年団活動に参加していたようですが、主として東京に在住していました。昭和三年の「京一中同窓会京浜支部名簿」（稲葉家文書D七二・〇四三）には、一三代市郎右衛門の住所が東京市渋谷区神泉町と記されています。この間の事情がわかる資料は少なく、詳細な点は不明ですが、ミネラルフェルトを開発した（稲葉家文書C五二・三三二～三三四）理研保温材工業所を昭和一四年八月九日に退職し（写真A三三七）、その後は、宮地鉄工所に勤めていたようです。

束は、余暇にスキー場などを含む各地へ旅行していました。これは、「風俗人形」と墨書された段ボール箱に入っていたおみやげ品（稲葉家民具民〇〇一）、手帳・各地の観光パンフレットやスキー用品のカタログ・陸地測量部五万分の一地形図（稲葉家文書D七四）、写真が残されていることからわかります。



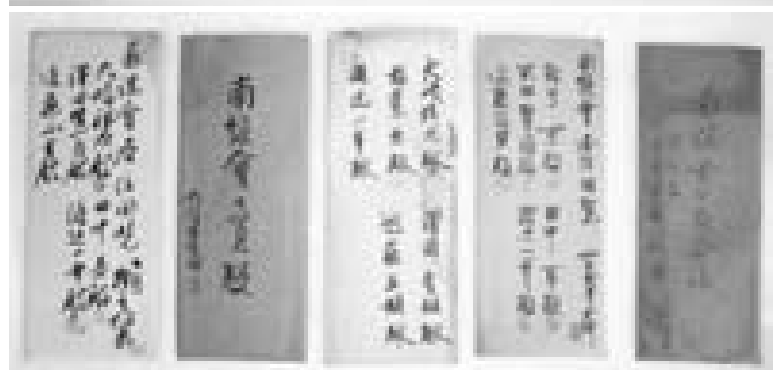
上 祭礼のようす【写真A176】
中 犬養健・芦田均と【写真A181】
下 神鍋山スキー場【写真A231】

束は、昭和九年七月に江ノ島（写真A一六六・一七三）、同年一月に犬養健・芦田均との集合写真の撮影（写真A一八二）、昭和一〇年四月に修養団講習（写真A二〇五）、同年九月に久美浜の青年団長として陸上大会に優勝（写真A二〇九・二二七）、昭和十一年一月に神鍋山スキー場（写真A三三二）、昭和十二年九月に上高地（写真A二六七・二七二）、昭和十三年二月に湯沢・石打スキー場（写真A二〇九・二二七）、同年六月に箱根・駒ヶ岳（写真A二八〇・二八三）、同年八月に大磯海岸（写真A一九一・三〇〇）、昭和十四年一月一日に霧ヶ峰スキー場（民〇〇一・写真A三二六）、同年一月二日に山中湖スケート（民〇〇一・写真A三四九・三五三）、同年三月一九日に伊豆大島（民〇〇一・写真A三三〇・三三二）、同年一〇月一六日に鬼怒川温泉（民〇〇一・写真A三三〇）、同年一月三日に奥多摩（民〇〇一・写真A三三二・三三四）、昭和十五年一月一日に妙高高原（民〇〇一・写真A三三九・三四二）、同年一月二六日に菅平スキー場・根子岳（民〇〇一・写真A三四三・三四八）、同年四月一九日に水上温泉（民〇〇二）へ行っていることがわかります。

また束は、謡曲をたしなんでいたようです。昭和一七年には、「南謡会」という会を作り、月ごとの例会を会員の自宅持ち回りで行っていたことがわかっています（稲葉家文書D七二・〇三三・〇三七）。



右上 天橋立にて【写真A255】
 右二段目 河口湖スケート【写真A349】
 右三段目 各地のみやげ品
 【稲葉家民具民001】
 右四段目 南謡会例会案内
 【稲葉家文書D72-033~037】
 左上 霧ヶ峰スキー場【写真A316】
 左下 理研保温材工業所退社時
 【写真A327】





右上 在学中の稲葉喬【写真D105】
 右下 在学中の風景【写真D173】
 左上 走高跳【写真D109】
 左下 厳島神社にて集合写真【写真D133】

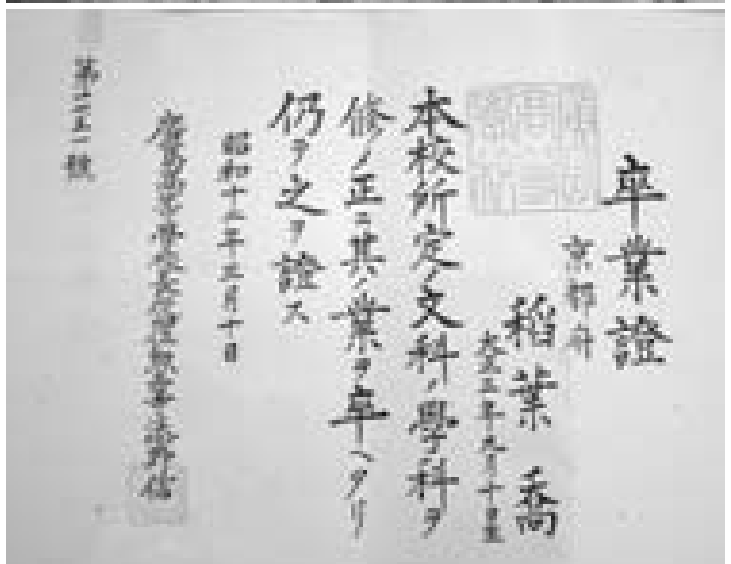
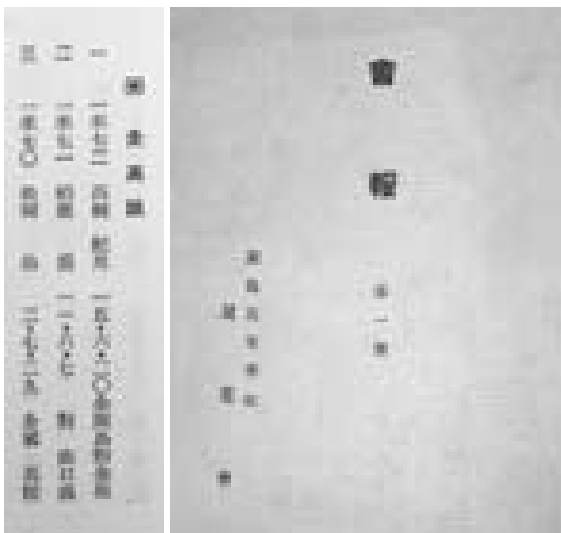
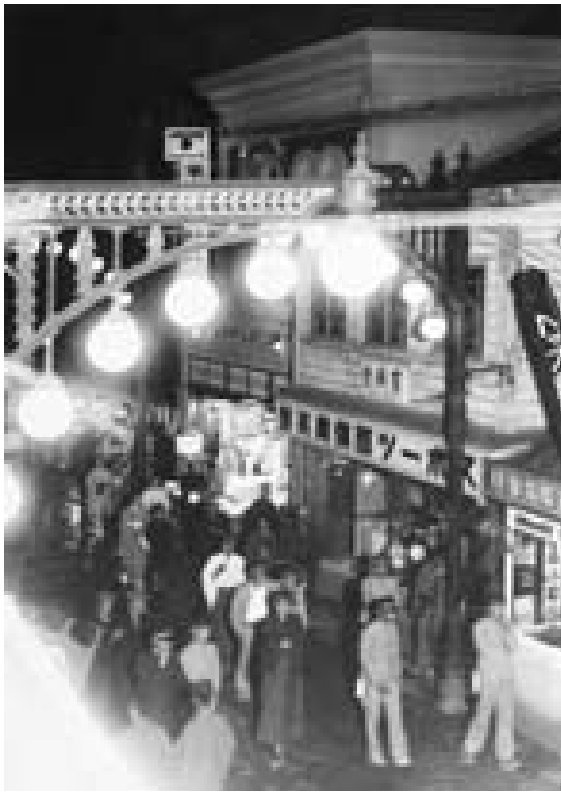
四・稲葉喬の広島高等学校時代

喬は、京都府立京都第二中学校卒業後、昭和九年四月に広島高等学校（現在の広島大学）文科甲類へ入学しました（稲葉家文書C四九・〇三六）。一年の時には学級総代となっています（稲葉家文書C五五・一七二）。この時の写真アルバム二冊が残されており、当時の学生生活の風景がわかります。東のアルバムとは異なりメモが少ないため、細かい年代や撮影場所はわかりません。写真には、宮島や被爆前の広島風景が写されています。また東と同様に、軍事教練の風景も残っています。

喬は、陸上競技が得意であったようであり、在学中は陸上競技部に在籍していました。陸上競技部同窓会の双葉会の会報（稲葉家文書A一九・九三）によれば、走高跳の項目に、太学陸上部歴代一位の一七センチメートルの記録が残っています。それを物語るように、写真アルバムの中には、走高跳など陸上競技の風景を写したものがいくつか残っています。

また喬は、在学中より東京帝国大学（現在の東京大学）受験を考えていたようであり、昭和九・一一年度の入試問題を手元にもっていました（稲葉家文書C四九・〇三七・〇三八）。

昭和一二年三月には広島高等学校文科を卒業します（稲葉家文書C五五・一七三）。卒業時には、広島高等学校を経由して東京帝国大学へ出願していたこと（稲葉家文書C五五・一一六九）、あわせて徴兵猶予を出願していました（稲葉家文書C五五・一一七二）。しかしこの年は、東京帝国大学へ入学できなかったようであり、神戸商業大学（現在の神戸大学法学部・経済学部・経営学部）へ入学しました。

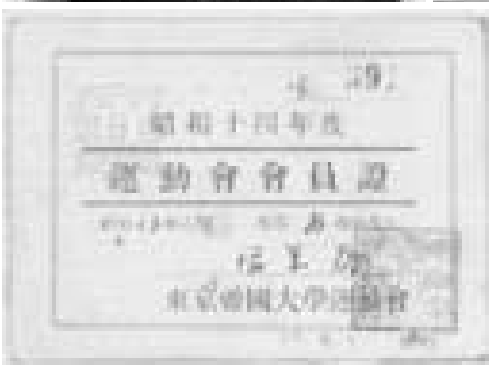


右上 「高等学校前停留所」【写真D199】
 右中 軍事教練の風景【写真D174】
 右下 卒業証【稲葉家文書C55-173】
 左上 広島風景【写真D190】
 左中 双葉会会報と稲葉喬の記録部分
 【稲葉家文書A19-923】
 左下 東大入学試験問題【稲葉家文書C49-038】

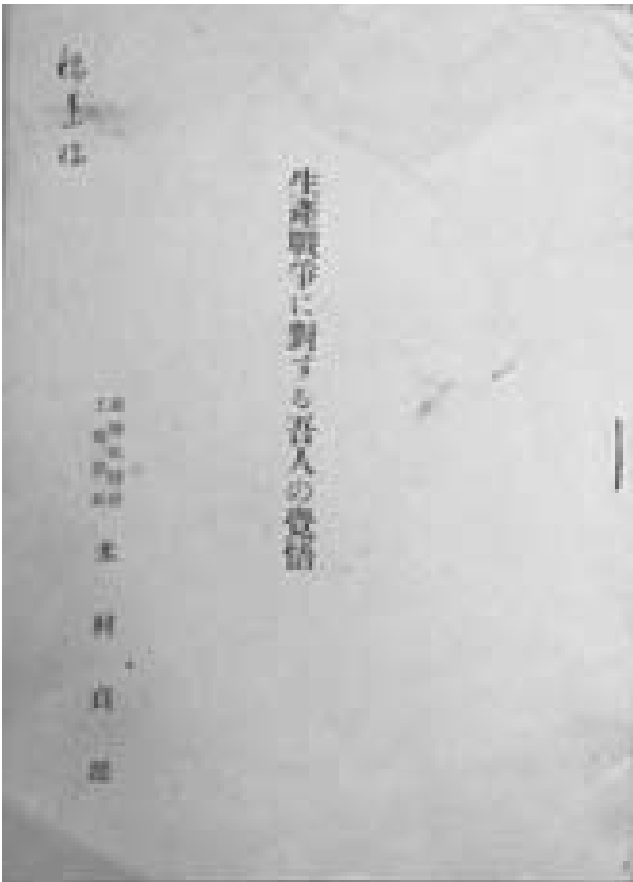
五、稲葉喬の東京帝国大学時代とその後

喬は、昭和一三年に念願の東京帝国大学経済学部商業学科へ入学を果たします。これに伴い、神戸商業大学を退学しています（稲葉家文書C四九・〇三九）。当時、父親の三代市郎右衛門や兄の束が東京に住んでおり、父や兄と一緒に生活しながら通学していたようです。残念ながら、この当時の写真はほとんど残されていません。喬は、帝大においても陸上競技に関わっていたようで、関東学生陸上競技連盟の手帳（稲葉家文書A一九・八八四）や昭和一四年度の運動会会員証（稲葉家文書D一〇八・五七二）などが残されています。昭和一四年の手帳には、七月二日に京都帝国大学にて全国高校陸上競技大会があつ

たことが記されており、品川発の夜行で京都へ行ったことがわかります。また出身の広島高等学校陸上競技部についても、同窓会報（双葉会）や六高（現在の岡山大学）との対戦につき声援の願書（稲葉家文書A一九・九三四）が残されているため、卒業後も関係があつたことがうかがえます。当時の大学の講義時間割が手帳に挟んだ状態で残されており、毎週月曜日の朝には軍事教練があつたことがわかります。そのほかは、平常の講義が行われていました。喬は、昭和一六年三月に学士試験に合格し、東京帝国大学を卒業します（稲葉家文書C五五・一七六）。その後、喬は昭和電工株式会社大町工場へ就職しており、信州へ引越しました。昭和一八年三月には、兄の束が結婚しており、東京であつた披露宴に出席していることがわかります（稲葉家文書C六二・六四八・一二）。



- 右上 神戸商業大学退学許可証
【稲葉家文書C49-039】
- 右中 鉄道省学生割引証
【稲葉家文書D74-003、D108-568】
- 左上 東京帝国大学在学時の稲葉喬
【写真D028】
- 左中 学生競技者手帳
【稲葉家文書A19-884】
- 右下 学生競技者手帳に挟まれていた時間割
【稲葉家文書A19-884】
- 左下 昭和14年度運動会会員証
【稲葉家文書D108-572】



- 右上 東京帝国大学卒業証書
【稲葉家文書C55-176】
- 左上 稲葉喬が使っていたペーパーホルダー
【稲葉家文書C49-036~045】
- 右中 社員訓【稲葉家文書A19-918】
- 左中 生産戦争に對する吾人の覺悟
【稲葉家文書A19-941】
- 右下 産報指導者手帳
【稲葉家文書A19-886】
- 左下 限界ゲージカタログ
【稲葉家文書A19-942】



六・稲葉東の結婚

東は、戦時中の昭和一八年正月に結納し（稲葉家文書C六二・六四〇）、同年三月二八日に、東京帝国ホテルにて挙式しました。関係資料は、「束婚儀諸件」と書かれた紙袋に一括して保管されていました（稲葉家文書C六二・六三七～六六四）。

一件書類から、披露宴は三月二八日（写真D〇五一・〇八二）と四月四日に、帝国ホテルを会場に行われる予定でした。しかし東の友人を招待した四月四日分については、差支えがあったため、四月八日に延期され、会場を大東亜会館に変更して行われました（稲葉家文書C六二・六六四・九）。また四月二日には、京都都ホテルにて、両家親族の懇親の宴が行われています（稲葉家文書C六二・六四九、写真B七七〇）。

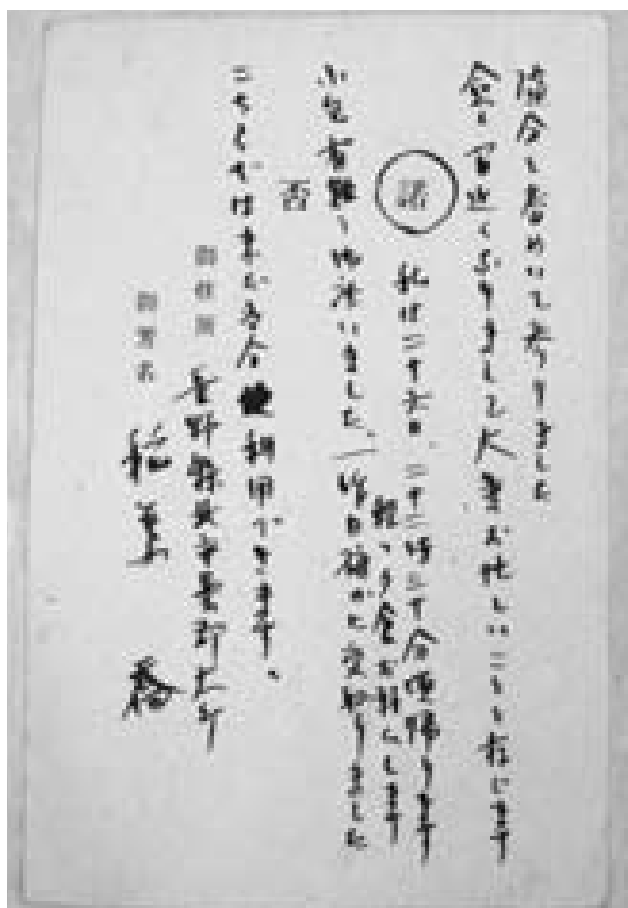
一連の資料には、招待状とともに、返信葉書や式・披露宴の席次を記したメモが残されており、あわせて当日の写真もあります（写真B七七〇、D〇五一・〇五九・〇八二）。



東・妙子婚礼写真（昭和18年3月28日）【写真D059】



東・妙子婚礼写真（昭和18年3月28日）【写真D081】



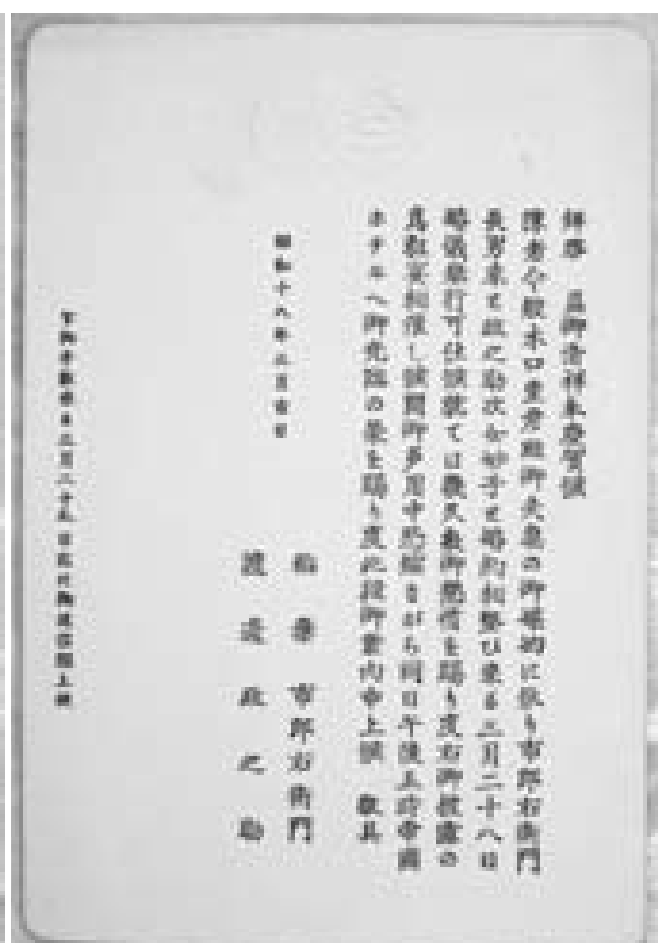
喬の返信葉書【稲葉家文書C62-648-2】



東婚儀諸件封筒【稲葉家文書C62-637~664】



懇親の宴案内状【稲葉家文書C62-649】



結婚披露宴案内状【稲葉家文書C62-645】

七. 戦時下の稲葉家で使われたもの

木棚に納められた資料です。以下の資料が納められていました。



防毒面・鉄カブト・遮光スタンド傘【稲葉家民具他005】

①防毒面三面（紙箱入）

「（紙箱印字） 甲二號 共和 昭和一七年 二月」

「（防毒面印字） 一七式防空用防毒面昭和 一七年十一月」

紙箱包紙新聞紙 読売報知昭和一九年三月三日 「（包紙上書） 防毒マスク」

②スタンド

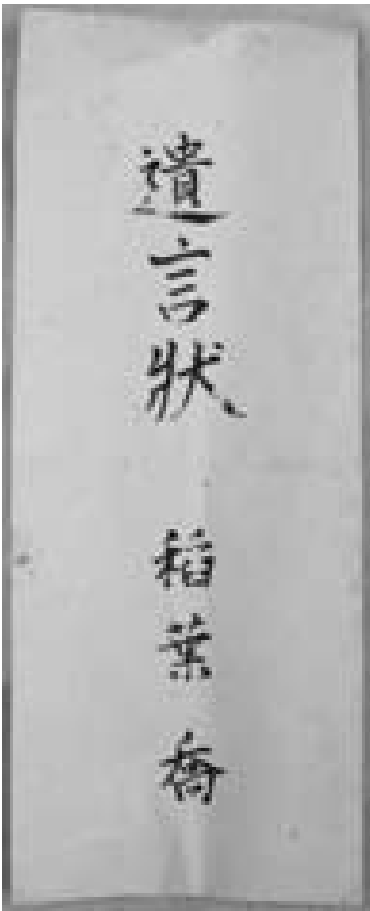
③鉄カブト三点

包紙新聞紙 読売報知昭和一九年三月三日 「（包紙上書） 鉄兜三ヶ」

④木三宝一点 包布入

⑤遮光スタンド傘 大二、小二

戦時下の緊迫したようすがわかる資料です。



遺言状封筒【稲葉家文書C89-139】

八. 稲葉東と喬の出征

東は、太平洋戦争後期の昭和一九年六月二五日に再応召を受け北支方面へ出征しました。召集令状（いわゆる赤紙）は残されていません。

出征に伴って関係者より餞別を受けています。その時の熨斗袋（稲葉家文書C八九・二六二）や餞別控（稲葉家文書A一一・〇〇九）が残されています。あわせて出征にあたって寄せられた日の丸寄書（稲葉家民具衣四〇・一二二）が残されており、地元の人々や親類、関係者の名が記されるほか、父三代市郎右衛門（紫鱗）の俳句が記されています。その後の経緯がわかる資料はありませんが、昭和二〇年四月に東は、米軍が上陸した沖縄にて従軍していました。喬は、東の再応召までの間に応召されて従軍していたものと思われませんが、その経緯のわかる資料は残されていません。なお喬は、年月日不詳の資料ではありますが、遺言状を書いていたようです。中身は残されていませんが、封筒のみが伝わっています（稲葉家文書C八九・一三九）。

九. 稲葉東・喬の戦死

東は、昭和二〇年四月一九日に、沖縄の西原・我如古（現在の沖縄県浦添市・宜野湾市）にて、米軍の迫撃砲を受け戦死しました。

この時のようすについては、同じ部隊に所属していた同僚から、戦後の昭和二十一年一月二二日付葉書により知らされています（稲葉家文書C五二・一五八）。連絡の任務を終え、部隊へ戻る途中に起こった悲劇でした。

「謹啓前略御免被下度候

愚生

稲葉東君とは応召以来死ねば共にと互に誓つ

た戦友にて候然るに我一人不甲斐なく生き永へて今

此の悲報を送ろうとは誠に皆々様に対して心痛の極み

にて候同君は四月十九日連絡の任を了へその帰途

敵迫撃砲のため右脚及腹部に破片創を受け天

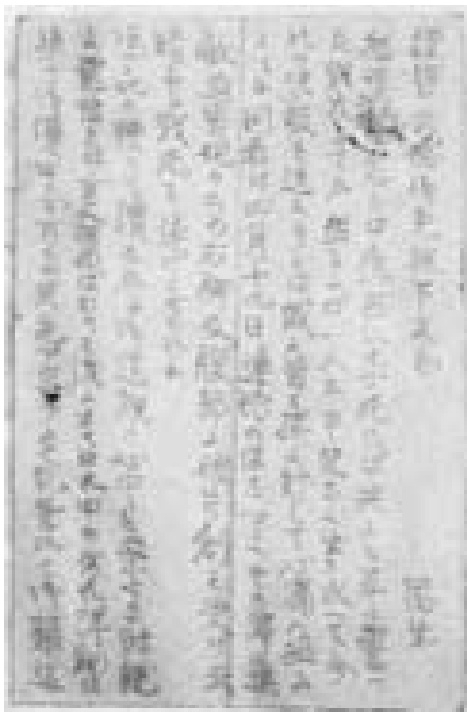
晴なる戦死を遂げさせられ候



死亡告知書（喬）【稲葉家文書C52-157】



死亡告知書（束）【稲葉家文書C52-161】



束の戦死のようすを知らせた書簡
【稲葉家文書C52-161】

鳴々此の便りを読まれる御遺族の心中を察する時既に覚悟とは言へ如何ばかりと涙にさそはれ申候何れ詳細は追て御伝へ申す可く候共先づ左手にて乱筆以て御一報迄」

束の戦死の公報は、昭和二年に稲葉家に届きました。一番早いものは、昭和二年二月一日付留守業務部からのものであり（稲葉家文書C五二・一六〇）、七月一八日に死亡告知書（稲葉家文書C五二・一六二）が届いています。

喬は、昭和一八年三月の東の披露宴から一九年の間には応召されたと思われませんが、その経緯はわかりません。最後は、「死の行進」と呼ばれたインパール作戦に従軍し、昭和一九年六月二三日にビルマで亡くなっています。葬儀は、同年十一月に行われ、香典控が残されています（稲葉家文書D九〇・一三三）また喬の死亡告知書は、昭和二〇年一月一日に届いています（稲葉家文書C五二・一五七）。大正時代に与謝・中郡長を歴任し、一三代市郎右衛門とも親交のあった宮津町の山本三省は、束・喬の戦死に伴い、哀悼の挽歌を詠んでおり、短冊が残されています（束挽歌は稲葉家文書D九〇・〇九六、喬挽歌は稲葉家文書C六〇・〇二〇）。

稲葉家は後継ぎとなるはずの男子二人を戦争で相次いで失いました。江戸時代から続いた稲葉家にとって太平洋戦争は、最大の悲劇でした。



右上・右下 日の丸寄書【稲葉家民具衣40-1・2】

左上 稲葉東追悼短冊【稲葉家文書D90-096】

左下 稲葉喬追悼短冊【稲葉家文書C60-020】

稲葉家展示解説リーフレット2

稲葉東・喬 ～昭和前期の稲葉家～

編集・発行 京丹後市教育委員会 発行 平成22年3月